

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25285250

研究課題名(和文) 人格形成の中核となる幼・小・中連携による道德教育推進プログラムの開発に関する研究

研究課題名(英文) Study on development of the moral education promotion program by the cooperation with kindergarten and elementary and junior high school becoming the core of the character development

研究代表者

押谷 由夫 (oshitani, yoshio)

武庫川女子大学・教育研究所・教授

研究者番号：50123774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：生涯にわたる人格形成の基礎づくりという視点から、幼稚園、小学校、中学校と一貫して取り組める連続的な道德教育推進プログラムを開発に取り組んだ。子どもたちの道德学習は、生活する場全体を通して、しかも連続的に行われる。本研究は、学校における道德教育の視野を縦軸(学校段階)と横軸(生活の場)と本質軸(人格的成長)の3つを基軸として、内外の研究や実践的取り組みとかがわらせながら、調査研究を行い、将来を見越した今日的課題を踏まえて、幼・小・中学校と連携した道德教育推進プログラムを追究し成果を収めることができた。

研究成果の概要(英文)：I challenged to development by a continuous moral education promotion program that kindergarten and elementary and junior high school were consistent from a viewpoint to be made with foundations of the character formation for the life and could wrestle. The morality learning of children is carried out through the whole living place continually. This study researched a field of vision of the moral education in the school while letting vertical axis (school stage) and cross axle (place of the life) and three of the essence axis (character growth) concern with an internal and external study and based on the contemporary problem that foresaw the future, Kindergarten and elementary and junior high school investigated the moral education promotion program that cooperated and were able to put result.

研究分野：教科教育学

キーワード：道德教育プログラム 総合単元的道德学習 学校、家庭、地域連携 外国の道德教育 特別の教科道德

### 1. 研究開始当初の背景

日本の教育の指針を示す教育基本法が、平成18年に改正された。教育の目的は、旧の教育基本法と同様、人格の完成を目指す(第1条)としているが、さらに具体的に、幼児期から人格の基盤づくりを開始し(第11条)そのことを継続しながら、生涯にわたって人格を磨き豊かな人生が送れるようにする(第3条)ことを明記している。

では、具体的にはどう取り組むのか。人格の基盤は道徳性であり、その道徳性を計画的・発展的に育むのが学校における道徳教育だとされる(文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』)。だとすれば、これからの学校教育は、道徳教育を中核として改善を図って行かねばならないことになる。

研究代表者は、文部省・文部科学省で道徳担当の教科調査官として国の道徳教育行政及び学校現場の道徳教育推進に携わり、現在まで、学校教育の中核としての道徳教育の在り方について様々な視点から研究してきた。すでに基盤研究(B)で取り組んだ学校・家庭・地域連携の道徳教育推進プログラムを踏まえて、さらにこれからの社会の変化や新たな課題を見越して、幼・小・中学校の連携のもとに、生涯にわたる人格形成の基礎づくりとなる道徳教育の推進プログラムを開発しようと計画した。

### 2. 研究の目的

本研究は、改正教育基本法において強調された幼児期からの生涯にわたる人格形成の基礎づくりの中核となる道徳教育の在り方について提案を行うものである。具体的には、生涯にわたる人格形成の基礎づくりという視点から、幼稚園、小学校、中学校と一貫して取り組める連続的な道徳教育推進プログラムを開発することを目的としている。子どもたちの道徳学習は、生活する場全体を通して、しかも連続的に行われる。本研究は、学校における道徳教育の視野を縦軸(学校段階)と横軸(生活の場)と本質軸(人格的成長)の3つを基軸として、内外の研究や実践的取り組みとかかわらせながら、調査研究を行い、将来を見越した今日的課題を踏まえて、幼・小・中学校と連携した道徳教育推進プログラムの開発を行い、実践化を図ろうとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究は、道徳教育の取り組みに関する国内外における研究を踏まえて、我が国独自の人格の形成を中核とする学校教育の在り方を提案するものである。大きくは次の2つの方法で行う。

#### (1) 諸外国の現地調査

第1は、諸外国における道徳教育の動向と課題をトータルに明らかにすることである。すでに、中国、韓国、アメリカについては数年にわたり共同研究を進めている。

それらを踏まえて、さらに、ヨーロッパの道徳教育の動向を明らかにする。伝統を大切にしつつ今日的課題に心える道徳教育を追求しているイギリスと、学力世界一ということで注目されるフィンランドにおける道徳教育について現地調査を行う。さらに、これからの教育課程改革全体との関連で、日本の教育改革においても参考にしたオーストラリアの道徳教育の取り組みについて、現地調査を基に明らかにし、日本の道徳教育の現状とこれからの在り方について、多面的に分析する。

#### (2) 日本の道徳教育実践の分析

第2は、日本の道徳教育実践について、世田谷区と滋賀県の長浜市と草津市、湖南省における道徳教育推進校の実践を中心に分析を行う。

世田谷区では、人格教育を柱に学校改革を行い、教科日本語を設けるとともに、地域運営学校を目指して小・中一貫した9年教育に取り組んでいる。アメリカのキャラクター・エデュケーションも取り入れており、世界に開かれた日本型の道徳教育を研究する絶好の場であるといえる。

他方、長浜市は広域市町村合併を契機に道徳教育を柱として、英語特区の指定も受けながら幼・小・中一貫した教育実践に取り組んでいる。地方における世界に開かれた日本型の道徳教育を研究するのに適した場と言える。さらに、草津市は、全国で一番人口の増えている市であり、ICTの導入や道徳教育を中核とした幼・小・中における道徳教育の連携に取り組んでいる。また湖南省は、外国人労働者の増加から、国際理解を考慮した教育に取り組んでいる。このような地域での具体的取り組みを分析する。

#### (3) 道徳教育プログラムの開発

この2つのフィールドを基盤として、本質軸(人格形成)を柱に、縦軸(発達段階・学校段階)と横軸(道徳学習の場)を統合し、国際性や今日的課題を視野に入れた道徳教育推進プログラムの開発を行う。その中で子ども自身が成長を実感し道徳学習を発展させる「自分づくりノート」も開発する。

なお、現在日本の道徳教育は、抜本的改善・充実を図るべく、「特別の教科 道徳」の設置を中核として、教育課程の改革に取り組んでいる。それらについての分析も含めて提案を行う。

### 4. 研究成果

研究の成果として明らかにしたことを、順に報告する。

まず海外の道徳教育に関する現地調査による研究のまとめである。

#### (1) 中国の道徳教育

中国の道徳教育については、継続的に研究を行っているが、特に長春師範大学での研究会を中心に、幼稚園、小学校、中学校での取り組みについて参与観察しながら調査を行

った。幼稚園では、知的保育に重点がいつているが、かなり独自の取り組みもなされていた。特に基本的マナーをはじめとして道徳的行動の習得を目指した取り組みが多く行われていた。生活の自立を道徳的行動の育成という視点から計画的に取り組んでいた。

小学校においては、一、二年生は、道徳教科「品德と生活」を中核として、様々な体験活動と関連させて道徳教育が行われている。生活の中での道徳的行動や道徳的気づき指導に重点を置いている。三年生からは、「品德と社会」となり、中国の歴史や文化、伝統、偉人、共産主義的ものの見方や考え方などについて触れられており、徐々に知的な学習が重視される。体験活動も集団的活動が多く取り入れられ、社会的自立に対する取り組みが強化されている。

中学校では、「思想品德」となり、中国の文化や伝統、様々な偉人、国を支える思想、具体的課題に対する対応などについて深く学べるようになってきている。集団活動や道徳的実践活動なども重視される。また、生徒たちのストレスを解消したり軽減したりするための部屋（サンドバックが置かれた部屋や縫いぐるみが置かれている部屋など）を設けたり、心を落ち着かせる音楽を聞くことができる場所を設けたりしている。道徳教育の中に心の健康を位置づけ取り組んでいるのである。心の成長に合わせて心の不安定への対応を考えているのは、日本でも取り入れるべきである。

#### (2) フィンランドの道徳教育

フィンランドの道徳教育は、宗教教育とのかかわりで行われる。では、どのような宗教教育が行われているのか。現地で、授業を参観しての研究会をもった。授業では、日常生活の中に定着している宗教的行事の意義について学びながら、同時に生命尊重の具体的取組（卵をふ化させて雛になるまで世話し観察する取組など）を行い、さらに、自分たちができる地球を守る取組について話し合い実践するといったことが行われていた。自分たちが神にご恩返しをするにはどうすればよいのかを具体的に考えるようにしていると捉えられる。このような取組は、宗教教育としてではなく、道徳教育として取り組める要素を多く持っている。日本でも取り組むことができる。

また、フィンランドの学力育成のポイントは、思考のスキルを学ばせるということである。学力の向上は、結果であって、プロセスにおいては、次代を担う子どもたちを育てる使命感が教師に強く、一人一人がしっかり考え、主体的に判断し、フィンランド国民として責任ある行動がとれるようになることを目指している。

さらに、フィンランドの小学校では、母国語はもちろん、スウェーデン語、英語ともう1カ国語（ドイツ語、フランス語など）も取り上げるといったことであった。その根本に、フ

ィンランドを大切にするという愛国心がある。つまり、母国語をマスターして、さらに近接国と友好関係を築くといった観点から、外国語教育に取り組む。したがって、隣国の文化を学ぶことと平行して、言語の教育が行われる。このことも日本は学ぶべきである。

#### (3) イギリスの道徳教育

イギリスの道徳教育は、ナショナルカリキュラムに基づき、充実が図られている。各学校には、政府からの資料や自治体からの資料などが備えられており、それらをもとにした各校独自の取組がなされている。

イギリスでは、キャンベル政権になって、シチズンシップやP S H Eの見直しが行われたが、メイ政権になって、また再検討されている。イギリスでは、宗教教育が基盤にあるが、その宗教教育は、共生を柱に、それぞれの宗教について知ること、特に生活習慣の違いなどを具体的に知る学習が行われる。そして、宗教と生活に重点を置きながら、それぞれが共存しながらどう生きていくかを、具体的に即して考える学習を行っている。このような宗教教育は、世俗道徳とも密接に関わっており、日本でも参考にすべきである。

また、シチズンシップの授業は、調べ確かめる学習が重視されていた。さらに、P S H Eについては、特定の時間を設けているところも多く、生活上の具体的な問題についても取り上げられていた。また、道徳教育的視点からの学校経営や学級経営が多く見られた。さらに、社会教育機関との連携も進んでいる。スポーツを通しての人間形成が伝統的に生きていることを実感した。心の健康と体の健康を同時に考え、具体的に取り組んでいくという道徳教育の在り方も学ぶべきである。

#### (4) オーストラリアの道徳教育

オーストラリアの道徳教育は、多文化共生を考える上で大いに参考になる。オーストラリアでは、国が学習指導要領を示しており、それが州レベルで検討され、各学校で、独自にカリキュラム編成をして実施されている。すべての教育において多文化共生を基本として、一緒に考え、調べ、話し合い、創り上げていくといった活動が重視されている。特に特徴的だったのは次の点である。

まず、教科書がなく、カリキュラム編成と教材開発、独自の授業実践を教師の専門性と考えており、ほぼ毎日、学年、あるいは学年段階で打合せが開かれている。

また、ノート指導を重視している。教科書はないために、様々な教材を自作したり探してきたりして用意し、それをノートに貼らせて、自由に書いていく形で授業を行う。グループ学習や前に集まって対話的に行う授業など工夫されている。それらの活動を通して自分なりのノートを創っていく。それは、自作のテキストとなる。

さらに、個人目標を具体的に考えられるように指導している。学習問題などのワークを用意し、いくつかのレベルを設定し、どのレ

ベルをクリアするかも書けるようにしている。また、生活上の留意点として道徳的価値意識に関わる目標を設定するようにしている。

学級経営においては、特に道徳教育を重視している。教室には、道徳的価値に関する目標が掲示されている。あるクラスでは、毎日その中から一つを選び、今日の目標とし、ノートにその目標に関わる1日の様子を記述するようにしている。なお、教室掲示で目についたのは、思考のスキルや問題対応のスキル等が掲示されていたことである。具体的にどうするかを考えるスキルを、日常生活の中でも身につけられるように配慮がなされていた。

幼児教育との連携においては、小学校内に入学前の子どもたちが通える教室があり、小学校入学までの様々な取組みがなされる。また言葉の指導についても、ボランティアの人達の協力を得て個人的な対応もなされている。

幼児施設においては、のびのびと様々な体験ができるように環境を整備し(世界地図や外国の国旗なども掲示している)活動計画を創っている。それが、部屋に置かれている日記風のノートに記されている。一日の様子がよく分かるように子どもたちの様子も写真に撮って貼ってある。それらが毎日の記録ともなっている。このような取組の延長にあるのが、一人一人の成長日記である。

小学校に入学した子どもが持っていたのは、幼稚園でプレゼントしてもらった自分の成長記録であった。写真が多く貼られており、その子の宝物になるように創られていた。小学校では、自分たちでこのようなものを創っていくことが告げられている。自分の成長を写真も交えて確認していくのである。このような取組は、大いに学びたい。

#### (5) 韓国の道徳教育

韓国の道徳教育は、激動の中にある。李政権ではシチズンシップ教育を重視し、道徳科と社会科と同じグループにして選択必修にしていた。朴政権になり、船舶事故をきっかけに人格教育法が制定され、道徳教育の充実に法的に取り組んでいこうとしている。文政権になり、また流動的になっている。

韓国の道徳教育は、道徳科を中心に行われている。教科書は、ワーク的に授業の前後にも使えるような内容になっている。教科書ではあるが、授業外の学びも含めて編集されている。教科書の内容は、高等学校における道徳教育関連科目へとつなげることが重視され、韓国の文化や伝統、思想、歴史などについてかなり詳しく学習できるようになっている。体験や実践活動との関連等も考慮されているが、知識理解に偏っているように思える。社会科との関連が常に話題になっている。

なお、道徳の授業の導入などに使える教材もネットで提供しており、それらを使うことによって、授業に興味をもたせることができ

る。韓国教育課程評価院からは授業のための詳細な資料も提供されている。

人格教育法の具体的取り組みについてはこれからを注目したい。

#### (6) アメリカの道徳教育

アメリカの道徳教育は、今回現地調査は行うことができなかった。オバマ政権になり、連邦政府としては、キャラクター・エデュケーションから、サービス・ラーニングへと大きくシフトしているが、州の取組や各学校レベルでの取り組みにおいては、キャラクター・エデュケーションを重視している。トランプ政権になってもあまり変わらないように思える。

アメリカの道徳教育は、国家の一員として、さらに国家の中の1市民として、どう生きるかにかかわる具体的な指導が行われている。そのためには、国や社会を支える共通した価値意識をもち、具体的な方法を生活の場で追究できるように取り組んでいる。ボランティア活動との関連も強い。教師は、自分あるいは自分たちの特性に応じた取り組みを計画し、実行できるようにサポートしている。また、自分たちが行う体験活動について、目標をたて、具体的な計画を創り、評価も行い、さらに発展的に自分の生活に生かしていけるようにする、といったプロセスを記入するノートの作成を求めている。

なお、スクールカウンセラーも学校における道徳教育に積極的にかかわっている(心の健康にかかわる授業も行う)し、保護者や地域の人々も積極的にかかわっている。これらの取組は、日本にぜひ取り入れたい。

#### (7) 日本の道徳教育の取組

世田谷区の取組では、大きく道義教育の充実を図ることを柱に、アメリカのキャラクター・エデュケーションを参考に月ごとの道徳的価値項目を決め、校舎に掲示し、子どもたちに意識させながら日常生活が送れるようにしている。また、教科日本語を設定し、区で編集した教科書をもとに、日本の文化や様々な言語表現、日本の伝統的な思想や考え方などについても学べるようになっている。

さらに、中学校区内の小学校と中学校を学び舎として、独自の連携活動に取り組めるようにしている。道徳教育では、年間指導計画を交換したり、交流授業なども行われている。協力校での取り組みにおいては、特に地域との連携について重点的に取り組んでいる。震災時の避難所として学校が使われることを想定しての地域連携に取り組んでおり、様々なプログラムの開発を行っている。

滋賀県の長浜市では、各学校が独自の郷土資料を開発し、地域に根差した道徳教育に取り組んでいる。特に地域のボランティア団体との連携を密にして、学校、家庭、地域が一体となった道徳教育に取り組んでいる。協力校では、放課後の子どもたちの学習援助や日常的なかわりを密にしなが、道徳授業との関連をいかに図っていくかを中心にプロ

グラムの開発に取り組んでいる。また、英語学習との関わりにおいて国際化への対応を意識した道德教育のプログラム開発にも取り組んでいる。

草津市では、特に ICT を活用した道德教育の可能性について、多くの示唆を得た。情報モラルの学習も含めて ICT 教育を通した生き方教育について追究している。また、協力校では、読書活動の活性化と道德教育の充実に関する取り組みや、地域や社会で活躍している人たちの協力を得ての授業の工夫なども積極的に取り組んでいる。

湖南省では、特に学校経営や教育課程全体との関連の中でいかに道德教育を充実させるかについて重点的に取り組まれている。一人一人の自尊感情を育むことを柱に、心をひらく（授業づくり）、心をひろげる（啓発活動）、心をひびき合わせる（学校・地域連携）を中核にして、各学校が独自に取り組んでいる。協力校では、学校全体で取り組む道德教育プログラムの開発を中心に提案を行っている。

#### （8）道德教育の抜本的改善・充実

文部科学省では、「特別の教科 道德」の設置を中心として、道德教育の改革に取り組んでいる。その方向性は本研究と同じである。現在進行形で、新しい道德教育の在り方について次々に提案がなされている。それらの動向を踏まえて、学校現場での取り組みを調査しながら、本研究の推進を図った。

現在、学校現場では、新教育課程において、これから求められる資質・能力の3つの柱が提案されたことから、その育成に向かって動き出している。知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等である。は、学びの目的であり、一言でいえば人間としてよりよく生きること集約される。つまり、道德性の育成が、各教科の授業において重視されるということである。

また、開かれた教育課程が強調され、カリキュラム・マネジメントの充実が求められている。教科横断型の学習もしっかりと計画し取り組むことを求めている。さらに、家庭や地域、専門機関や専門家が協力して、学校課題に対応する「チーム学校」の取組が強調されている。具体的な授業においては、子どもたちが「主体的・対話的で深い学び」へと導くような授業改善を求めている。

道德教育の改革においては、これらを先導することを目指している。その中核に「特別の教科道德」の設置があると捉えられる。

#### （9）道德教育プログラムの提案

以上のことを踏まえて、道德教育プログラムの開発を行った。まず、学校全体で取り組む道德教育プログラム（全体計画）の提案である。道德教育の全体計画をどのように作っていくかである。既にどの学校でも作成しているが、PDCA サイクルを取り入れた計画にしていく必要がある。そのためには、目標をで

きるだけ行動目標にする。そのことによって具体的な取組の計画へと進めるし、評価も容易にできる。また、重点目標に、学校課題と社会的課題が挙げられているか、それに対する具体的方針が示されているかもポイントになる。そして、子どもたち一人一人に対する具体的取り組みについて明記されていること（ノート指導、一人一人に対する学年での検討会、一人一人を配慮した掲示の工夫、一人一人を配慮した縦割り活動の工夫など）、研修計画も具体的に述べられていること、幼稚園、小学校、中学校との連携について具体的に明記すること、を基本として、独自の全体計画の道德教育プログラムを創る。さらに、重点目標の一つを取り上げ別紙で、具体的にどのように取り組むのかを、学年ごとに作成し、横軸に日時を縦軸に学年を設けて、全体のポイントが分かるようにする。

また、道德教育の要となる「特別の教科 道德」の年間指導計画のプログラム作成においては、採択教科書の提案する年間指導計画をベースとしながら、地域特性や学校特性、子どもの実態等を考えて主題配列を学校独自のものにしていくこと。郷土教材や学校開発教材をどのように位置づけ活用していくかを工夫すること。教科書の重点指導を踏まえながら、各校独自の重点目標も考え指導を工夫すること。関連する教育活動については、特に関連させたい教育活動について明確に示すこと。重点的に指導する内容項目については別紙に示すこと。学期や年間の学びを振り返ったりする時間を確保すること。これらを共通理解し、特に重点的に取り組む内容項目については、それぞれの学習の深まりが図れるように工夫する。ここでも全学年を通して重点的に取り上げる内容項目に対して、縦軸に学年、横軸に日時を設けて、ポイントが分かるようにする。

本研究において、特に提案するのが、総合単元的プロジェクト型道德学習プログラムである。重点目標や社会的課題等に関して「特別の教科 道德」を要にして、関連する教育活動や日常生活等を密接に関連させた道德教育プログラムを様々に提案した。総合単元のテーマに応じて特徴をもたせているが、共通して、道德的感性に訴える取組、道德的思考力を鍛え問題解決を図っていく取組、表現物を作り上げていく取組、豊かな情操を育む取組、生き方の根幹を揺さぶられるような教材による学び、共通体験を通して充実感や自己有用感（役に立つ喜び）や所属感を味わえる体験を盛り込むこと。さらに、計画段階から子どもたちがかわれること。保護者や地域の人々も参加いただけるようにすること。道德教育プログラム用のノートを各自持たせてノートを宝物とできるように工夫すること。などを基本として多様なプログラムの開発を行った。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計18件)

- 押谷由夫 道徳教育とアセスメント 指導と評価 査読無 64 巻 1 月号 2018 pp.10-12
- 押谷由夫 義務教育における道徳教育の在り方 弘道 査読無 125 巻 1110 2017 pp.33-44
- 押谷由夫 道徳教育の新たな展開 弘道 査読無 125 巻 1110 2017 pp.8-23
- 押谷由夫 「特別の教科 道徳」の理念と実践」道徳教育研究 査読無 258 号 2017 pp.14-21
- 押谷由夫 世界に発信する道徳教育を弘道 査読無 125 巻 1107 2017 pp.31-34
- 押谷由夫 「特別の教科 道徳」を要に学校を真の人間形成の場にしよう 学校形成 査読無 58 巻第 8 号 2017 pp.6-9
- 押谷由夫 「自己の形成史」ノート(1) 学苑 査読無 908 巻 2016 pp.56-71
- 押谷由夫 未来につなぐ道徳性の芽生えの指導 幼児教育じほう 査読無 43 巻 9 号 2015 pp.3-11
- 押谷由夫 教科書を要として一人一人の道徳学習を発展させる 道徳教育 査読無 55 巻 6 号 2015 pp.4-7
- 押谷由夫 「特別の教科 道徳」を読み解く 教育研究 査読無 No.1366 2015 pp.14-17
- 押谷由夫 道徳教育の政策的流れとその意図・背景 季刊教育法 査読無 185 号 2015 pp.6-11
- 押谷由夫 夢を形にするロードマップを道徳教育 査読無 55 巻 4 号 2015 pp.68-70
- 押谷由夫 心に響き心を耕す道徳教育の充実 中学校 査読無 740 巻 2015 pp.4-7
- 押谷由夫 道徳教育新時代の幕開け Principal 査読無 2015 pp.16-19

〔学会発表〕(計8件)

- 押谷由夫 「特別の教科 道徳」の理念と実践 日本道徳基礎教育学会 2017
- 押谷由夫 「特別の教科 道徳」とカリキュラム・マネジメント 日本道徳教育学会 2017
- 押谷由夫 教科化における道徳教育の現状と動向 日本道徳基礎教育学会 2016
- 押谷由夫 日本における道徳教育改革 ヘルシンキ大学宗教倫理道徳研究会 2015
- 押谷由夫 日本の道徳教育の動向 日中道徳教育交流研究会 東北師範大学 2013

〔図書〕(計18件)

- 押谷由夫編著 平成 29 年度改訂小学校教育課程実践講座 特別の教科 道徳 ぎょうせい 2018 226 頁
- 押谷由夫編著 平成 29 年度改訂中学校教育課程実践講座 特別の教科 道徳 ぎょうせい 2018 214 頁
- 押谷由夫他 新教科書の授業プラン 明治図書 2018 117 頁
- 押谷由夫他 「考え、議論する道徳」を実現する 教育出版 2017 191 頁
- 押谷由夫他 小学校新学習指導要領の展開 総則 明治図書 2017 165 頁
- 押谷由夫編著 アクティブラーニングを位置つけた小学校「特別の教科 道徳」の授業プラン 明治図書 2017 136 頁
- 押谷由夫編著 生徒も教師もわくわくする道徳授業 東京書籍 2017 143 頁
- 押谷由夫他 教科教育研究ハンドブック 教育出版 2017 213 頁
- 押谷由夫他 道徳教育の理念と実践 NHK 出版 2016 295 頁
- 押谷由夫他 学校における「宗教にかかわる教育」の研究 中央教育研究所 2016 140 頁
- 押谷由夫編著 新教科道徳はこうしたら面白い 図書文化 2015 248 頁
- 押谷由夫他 次期学習指導要領を見据えた学習と評価 ぎょうせい 2015 149 頁
- 押谷由夫編著 道徳の時代をつくる 教育出版 2014 149 頁
- 押谷由夫編著 道徳の時代がきた 教育出版 2013 142 頁
- 押谷由夫編著 中日道徳教育交流研究 東北師範大学 2013 75 頁

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

- ・押谷 由夫 (Oshitani Yoshio)  
武庫川女子大学・教育研究所・教授  
研究者番号：5 0 1 2 3 7 7 4

### (3)連携研究者

- ・新井 浅浩 (Arai Asahiro)  
城西大学・経営学部・教授  
研究者番号：8 0 2 6 9 3 5 7
- ・貝塚 茂樹 (Kaiduka Shigeki)  
武蔵野大学・教育学部・教授  
研究者番号：2 0 2 5 1 0 0 1
- ・関根 明伸 (Sekine Akinobu)  
国土舘大学・体育学部・教授  
研究者番号：1 0 3 6 4 4 4 9
- ・伴 恒信 (Ban Tsunenobu)  
岡山商科大学・経営学部・教授  
研究者番号：7 0 1 7 3 1 1 9
- ・南本 長穂 (Minamoto Osao)  
京都文教大学・臨床心理学部・教授  
研究者番号：6 0 1 0 8 3 7 1